

日本事務局

◆理事会(五十音順)

磯村 尚徳	外交評論家
オスタン・ガエル(理事長)	PMC株式会社代表取締役
大浦 紀彦	形成外科医
木内 昭胤	元駐仏日本大使
ダヴィッド・バトリック	麻酔科医
寺島 左和子	形成外科医
原田 昌子	看護師
フサディエ・フランソワ	形成外科医
ブルデ・アルノ	麻酔科医
森川 すいめい	精神科医
山田 信幸	形成外科医
與座 聡	形成外科医

◆事務局(五十音順)

阿部 さやか	ドネーションサービス
石井 夕美	総務・経理マネージャー
小野寺 貴子	ファンドレイジング担当
片岡 英彦	広報マネージャー
熊澤 幸子	プロジェクト担当(東日本/ラオス小児医療)
畔柳 奈緒	事務局長
関 麻衣	ファンドレイジングマネージャー
玉手 幸一	プロジェクト担当(東日本/ラオス小児医療)
中村 あずさ	東京プロジェクト担当
堀江 優美子	ファンドレイジングアシスタント
マジョリ・メシニャック	事務局長アシスタント/プロジェクトアシスタント

◆パートナー(五十音順・敬称略)

社)アイキフ/アサヒブリテック(株)/アメリカン・エキスプレス・インターナショナル・インコーポレイテッド
アンステイテュ エステダム ジャパン(株)/イオンリテール(株)/IKEBANA ATRIUM/いちよし証券(株)
財)ウエスレー・ファンデーション/株式会社エイベックス・インターナショナル/エルフランス航空
特活)エクスパートチャリティアソシエーション/S.S.A.(スペシャルティ・ストラス・アソシエーション)
株)エルユーエス/LVMH モエ ヘネシー・ルイ ヴィトン・ジャパン(株)/外務省国際協力局民間援助連携室
グラント・ハイアット東京/株)グリーンディングライフ/コヴィティエン ジャパン(株)
特活)国際協力NGOセンター(JANIC)/在日フランス商工会議所/特活)地域精神保健福祉機構・コンボ
社福)社会福祉事業研究開発基金/財)ジャスト・ギビング・ジャパン/シャネル(株)
株)シャパン・イスラミックス・トラスト/マズジド大塚/ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)/新横浜プリンスベベ
株)スパープランニング/セールスフォース・ドットコム ファンデーション/特活)セカンドハーベストジャパン
全国労働者共済生活協同組合連合会/総合警備保障(株)/総合ユニコム(株)/株)ソシエ・ワールド
たまブラザー テラス/特活)チャリティ・プラットフォーム/株)デジタルステージ/テックウインド(株)
テロイト・トーマツ コンサルティング(株)/東京西ロータリークラブ/株)トヨタオートモビルクリエイト
日本理化学工業(株)/株)農心ジャパン/株)ハート婦人画報社 ヴァンサンカン編集部
株)パリュエックス/株式会社バルコ/株)フェリシモ/フランス料理文化センター
フレンチブルーミーティング実行委員会/ページ アラン・デュカス 東京
株)ベンチャーバンク ホットヨガスタジオLAVA/ホリアン(株)/ホワイト&ケース法律事務所
本橋お助け隊/三井住友銀行ボランティア基金/財)明治安田厚生事業団/メディカル・データ・ビジョン(株)
ヤファ(株)/UBMジャパン(株)/ユナイテッドビール(株)/ユニー(株)/株)LA DITTA(ラディッタ)
株)ランナース・ウェルネス/リンベル(株)/ロレアル財団/ロンシャン・ジャパン(株)

世界の医療団 (認定NPO法人)

特定非営利活動法人メドゥサン・デュ・モンド ジャпон
Médecins du Monde Japon

〒106-0044 東京都港区東麻布2-6-10 麻布善波ビル2F
Azabu-Zenba Bldg. 2F, 2-6-10 Higashi-Azabu, Minato-ku, Tokyo
106-0044, Japan
Tel: +81-(0)3-3585-6436 Fax: +81-(0)3-3560-8073
E-mail: info@mdm.or.jp

www.mdm.or.jp



世界の医療団

2014年3月発行

2013年度 活動報告書



©SEBASTIEN DUJANDAM



©SEBASTIEN DUJANDAM



©SEBASTIEN DUJANDAM



©Laurent Hazqui



©Lam Duc Hien



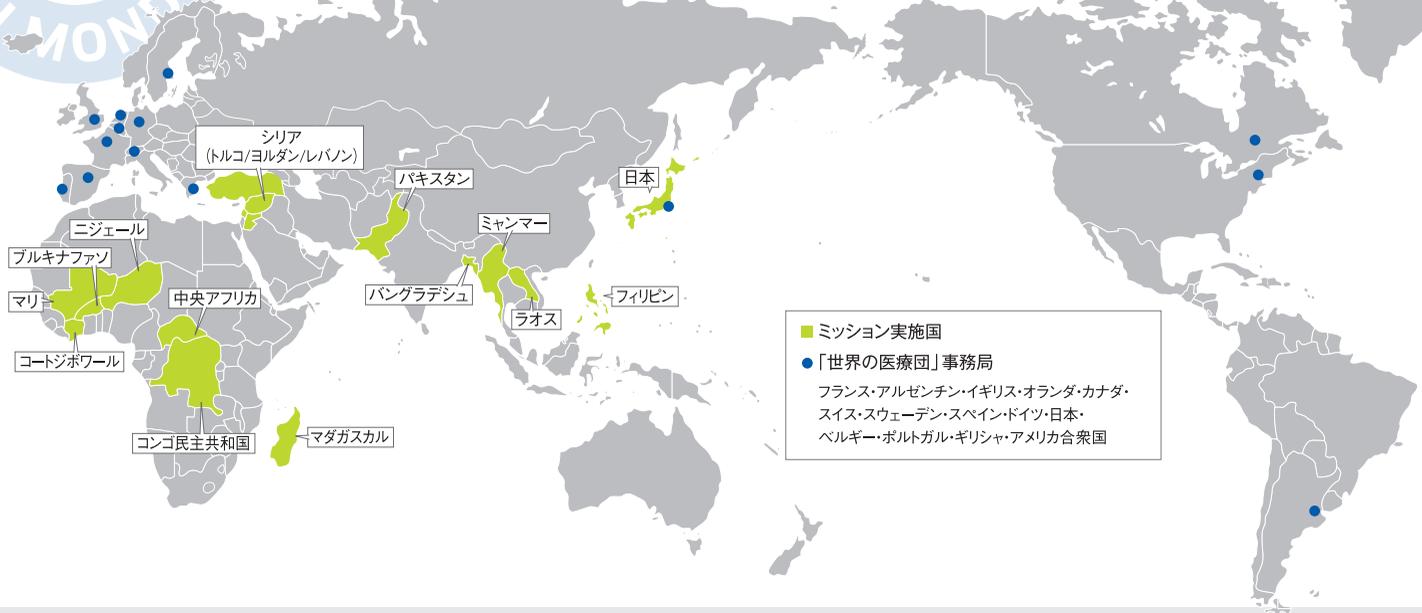
©SEBASTIEN DUJANDAM

「誰もが治療を受けられる未来を。」

“POUR UN MONDE OÙ CHACUN PEUT ÊTRE SOIGNÉ.”

世界の医療団の使命は「治療」と「証言」です。

世界の医療団 日本の活動マップ



支援者の皆さまへ

世界の医療団にとって2013年は緊急支援に始まり、緊急支援に終わりました。年明けとともにアフリカ中部のマリ共和国で戦闘が激しさを増し、住民——ほとんどが女性や子供、お年寄りでした——は安全を求めて住み慣れた場所を離れ、痩せたサヘルの地をさまよいました。シリアでも武力紛争はエスカレートし、市民を標的とした暴力は日常の風景と化しています。医療機関や医療従事者までもが攻撃の対象になる中、現地に残る限られたシリア人医師らが、命を賭して医療行為にあたっています。未曾有の台風被害に見舞われたフィリピンでは、400万人もの人が住む場所を失いました。度重なる緊急支援のお願いにもかかわらず、皆さまはその都度、温かいご支援を下され、支援を待つ人たちの心と体を温めました。

長期支援においても、医療から疎外された人たちに少しでも健やかな生活がもたらされるよう、活動を続けております。時間の経過は、良い結果をもたらすこともあれば、新たな支援ニーズを生み出すこともあります。ホームレス状態にある方の支援を行う東京プロジェクトでも、成果が出ている一方で、対処すべき課題はまだあります。東日本大震災からまる3年が過ぎた今も、現地のニーズは時間と共に変化しており、世界の医療団はこれからも被災地の人々に寄り添い続けます。

これらの活動はすべて、皆さまからのご支援によって実現できました。2013年に頂戴しましたすべてのご支援に対し、心から深く御礼を申し上げます。これからも、世界の医療団は全力で邁進します。今後とも私たちを見守って頂き、変わらぬご支援を頂けますようお願い申し上げます。

世界の医療団 日本
理事長 ガエル・オスタン

◆ 2013年ボランティア派遣実績

医師9名(阿久津麗華、江口智明、岡田朋子、寺島左和子、早川依里子、森岡大地、山田信幸、與座聰、吉村圭)、看護師6名(石原恵、稲垣安沙、木田晶子、定宗純子、鈴木彩乃、原田昌子)が、海外医療支援活動に参加しました。延べ329名のボランティアが国内支援活動(岩手県と福島県での被災地支援活動、東京プロジェクト)に参加しました。

【医療ボランティアの声】 看護師 木田晶子

2013年9月に医療ボランティアとして、ラオスに着任しました。ラオスはタイや中国、ベトナムなどに囲まれたメコン河沿岸の静かな国です。人々はみな明るく大らか、また恥じらいの精神と謙虚さも持ち合わせ、日本人とどこか通ずるものがあります。私は以前、青年海外協力隊員として2年間をここラオスで過ごし、この土地と人々が大好きになり、世界の医療団ボランティアとしてもどってきました。



日本では病気になったら病院へ行くことは当たり前ですが、ラオスでは違います。お金がない、病院までの交通手段がない、病気に関する知識がない——こうした理由から、病院で診療を受ける機会のごくわずか。そのため、肺炎や下痢といった、日本では治療可能な病気でも命を落としていく子どもたちがまだまだ多いのです。

ラオス小児医療プロジェクトは、現地保健当局と協力して乳幼児健診や診療の無料化を進めています。そうすれば、経済状態に関わらず病院で診てもらうことができます。同時に、現地スタッフと協働しながら小児医療サービスの質の向上を目指し、また、ご支援下さる皆さまに代わって、一人でも多くの子どもの命と笑顔を護りたいと思います。

Mali/Central African Republic/Syria
Republic of the Philippines

マリ、中央アフリカ、シリア、フィリピン

緊急支援



©Brunetti David



©SEBASTIEN DUJINDAM

◆マリ

アフリカ中西部の内陸国マリでは、前年に北部で勃発した紛争を契機に、2013年には35万人(国連発表)もの避難民が発生しました。マリは周辺国とあわせて世界の医療団が長期にわたり医療支援を行っていますが(59参照)、避難民が急増したため、国内6地域及びブルキナファソのキャンプにおける活動を強化。避難民が流入していたアルジェリア国境近くのマリ北部ティンザワテンに診療施設も新設し、栄養と医療へのニーズに即応しました。

◆中央アフリカ

2012年末に勃発した政府と反政府組織の紛争により、首都バンギは混乱のさなかにあります。医療機関を含む公的な施設は破壊、略奪され、市民への暴力、中でも女性を狙った性的暴力が多数報告されています。世界の医療団は現地パートナーを通じて、バンギ市内の避難民キャンプと医療機関に対し医薬品など物資を支援しているほか、性保健に関わる支援団体には助産師らを派遣して安全な妊娠出産や性感染症を予防するなど、女性が医療へアクセスできる基盤を整えています。

◆シリア

絶え間ない暴力から逃れるため、国内あるいは国境を越えて避難する人が急増しています。世界の医療団は支援を強化し、周辺のヨルダンとレバノンの難民キャンプにおいて病気やけがの治療、妊産婦や乳幼児のケアに当たっているほか、トルコのシリア国境近くに開設された術後ケアセンターの支援も行っています。また、政治的に中立なシリア人医師グループのパートナーとして、物資を供給したり活動を支援したりして、現在も国内で治療を待つ人たちに医薬品がたどり着くよう物流面での支援も行っています。

◆フィリピン

2013年11月にヴィサヤ諸島は巨大台風に見舞われ、壊滅的被害を受けました。400万人以上が住む場所を失い、医療機関を含むインフラが一時は機能停止状態に陥り、復旧作業は長期化しています。世界の医療団はマニラで長期支援を行っていたことから迅速に対応し、被害が集中したレイテ島に入って現地医療機関をサポートしました。医師や看護師、助産師で構成する移動クリニックが被害の多かった地域を巡回して感染症予防や妊産婦のケアにあたっています。

	マリ	中央アフリカ	シリア	フィリピン
人間開発指数(186か国中)	182位	180位	116位	114位
5歳未満の乳幼児死亡率(出生1,000人中)	176人	164人	15人	25人
平均寿命	51.9歳	49.1歳	76歳	69歳
医師の数(国民1万人あたり)	0.8人	0.5人	15人	データなし

Côte d'Ivoire

コートジボワール

長期支援

安心してお産ができる環境を確保することは、コートジボワールでは喫緊の課題です。妊産婦死亡率は、10万人当たり400人(日本は5人)*。出産時に合併症の危険のある妊婦が専門病院への搬送費用(約2万円)を支払えないために、適切な処置を受けられず命を落とすケースは珍しくありません。同国政府は、国の施策として母子医療無料化を進めていますが、現実には医薬品が乏しく、医療機関は何らかの支援を受けずには立ち行かない状態です。世界の医療団は、南西部の3地域で医療機関へ医薬品や備品を提供すると共に、スタッフの指導を行って母子医療の質を向上させる支援をしています。また、政府にも引き続き働きかけ、母子医療の無料化が実効性あるものとなるよう求めています。

* World Bank 2013



©SEBASTIEN DUJINDAM

人間開発指数
(186か国中) 168位
5歳未満の乳幼児死亡率
(出生1,000人中) 115人
平均寿命 56歳
医師の数
(国民1万人あたり) 1.4人

Niger/Mali/Burkina Faso

ニジェール、マリ、ブルキナファソ

長期支援 (国境を越えた「サヘルプロジェクト」)

アフリカのサハラ砂漠の南に、東西に帯状に広がるサヘル地域。やせた土地が広がり降水量は乏しく、農作物が豊富に生み出されることはめったにありません。砂漠化が進んでいる地域もあります。食糧価格の高騰によって貧しい人は食料を手に入られず、食糧危機は慢性化。窮状を切り抜けるために土地を手放して避難民になる人も少なくありません。必要な栄養を摂れないということは疾病のリスクも高まるのですが、十分な医療が提供されているとは言い難く、世界の医療団はサヘル地域内の三か国を10年以上にわたって支援してきました。避難民キャンプに隣接したクリニックで母子保健を中心としたリプロダクティブヘルスの推進やマラリアなどの疾病対策を行い、現地の保健当局とも協力しながら医療システムの向上を図りました。



人間開発指数
(186か国中) 186位 / 183位
5歳未満の乳幼児死亡率
(出生1,000人中) 125人 / 146人
平均寿命 55.1歳 / 55.9歳
医師の数
(国民1万人あたり) 0.2人 / 0.5人
※ニジェール、ブルキナファソの順。
マリは前掲(P4)

※人間開発指数・平均寿命 Human Development Report 2013 (UNDP)
※5歳未満の乳幼児死亡率・医師の数 World Health Statistics 2013 (WHO)

ラオス

Laos

長期支援 (小児医療プロジェクト)



人間開発指数
(186か国中) 138位

5歳未満の乳幼児死亡率
(出生1,000人中) 42人

平均寿命 67.8歳

医師の数
(国民1万人あたり) 1.9人

タイやベトナムなど5か国に囲まれた東南アジアの小さな内陸国ラオス。近年、経済発展が徐々に進む一方で、乳幼児の死亡率は改善されず、大きな課題の一つになっています。貧困などにより医療機関にいかれず、肺炎や下痢など医療へのアクセスがあれば治るはずの病気で命を落としてしまうケースが、依然として多いのです。世界の医療団日本が南部チャンバサク県で行うプロジェクトは、2年目に入りました。現地パートナーと協働で5歳未満児の健診や診察の無料化を進め、経済的理由による未受診を減らす努力を続けています。また、住民に受診を促すには、医療機関への信頼を高めることも重要です。人材の育成を行うと同時に、水道や流しなどを整備して衛生管理を向上させ、まずはスタッフが手を洗う習慣から定着を促しています。

コンゴ民主共和国

長期支援 (ストリートチルドレン支援)



©Lam Duc Hien

人間開発指数
(186か国中) 186位

5歳未満の乳幼児死亡率
(出生1,000人中) 168人

平均寿命 48.7歳

医師の数
(国民1万人あたり) データなし

世界の医療団は1999年以来、現地NGOと協力して首都キンシャサのストリートチルドレンの支援に携わっています。2万人とも3万人ともいわれるストリートチルドレンの半数は女性で、その多くが唯一の生活手段として売春を余儀なくされている現実があります。このため、世界の医療団は2009年から21歳以下の女性や5歳以下の乳幼児を持つ女性たちの支援に力を入れています。近年、ストリートチルドレンが爆発的に増加しているため、2013年にはシェルターを新たに開設しました。避妊や性感染症の危険について学ぶ機会を設け、医療機関との連携も図って彼女たちの安全な出産をサポートしています。また、路上生活を抜け出した女性たちをピア(仲間)ワーカーとして育成し、利用者の女性の相談に乗るなど、心身両面から支えています。

Madagascar/Bangladesh/Myanmar

マダガスカル/バングラデシュ/ミャンマー

スマイル作戦



1989年の開始から四半世紀を迎えた「スマイル作戦」。世界の医療団日本も1996年から日本人医師を派遣するようになり、2013年はマダガスカル、バングラデシュ、パキスタンに加え、ミャンマーで初めてのミッションを行いました。これらの国では、形成外科手術を行える人材も技術も圧倒的に不足しています。そのため、先天的、あるいは事故、病気など後天的理由により顔や身体に奇形や損傷を負った人たちの多くは手術を受けることなく、社会の偏見にさらされながらひっそりと暮らしているのです。チームが派遣される度に、たくさんの数の人たちが手術を求めて集まります。現地医療機関の協力のもと、数日間で何十人も手術を行うことも珍しくありません。医療ボランティアの森岡大地医師は、「無事に手術が終わり、包帯を外した時に患者さんが見せるほっとした表情に救われます」と語ります。スマイル作戦のもう一つの大切な役割は、現地スタッフの育成と技術移転。毎回、現地の医療従事者や医学生が数多く見学を訪れ、熱心に学んでいます。派遣先の国が「卒業」できるよう、これからも支援を続けます。

◆ミャンマー

【回数】3回(うち1回は事前調整ミッション)
【期間】1月27日～2月2日、6月1日～9日、11月30日～12月8日
【手術件数】53件 【派遣ボランティア】延べ11人

◆バングラデシュ

【回数】2回 【期間】2月14日～22日、11月14日～22日
【手術件数】82件 【派遣ボランティア】延べ18人

◆マダガスカル

【回数】1回
【期間】7月28日～8月4日
【手術件数】24件 【派遣ボランティア】2人

◆パキスタン

【回数】1回
【期間】9月1日～14日
【手術件数】19件 【派遣ボランティア】1人

日本Japan

福島そうそうプロジェクト

世界の医療団は、震災と原発事故に見舞われた福島県相双地区（相馬市、南相馬市、双葉郡）で2012年からこころのケアを続けています。発生から3年が経ち、被災地をめぐる状況の変化と共に、住民の方たちが抱えるこころの問題もより多様化、複雑化しています。このような状況下で、私たちは「忘れない」「続ける」を合言葉に支援を行っています。震災後に生じた精神科医療の空白を解消するため2012年に設立された現地NPO法人「相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会」の当初からのパートナーとして、同会が展開する活動に精神科医などの専門家を派遣しています。また、仮設住宅でのサロン活動や個別訪問に看護師を、母と子を対象にしたこころのケア活動には臨床心理士をそれぞれ派遣。活動を通じ、地域の実情や課題に対応した支援がまだまだ必要だと改めて認識しました。『ある時、活動中に震度3の地震が起きました。すると参加していた幼児の一人が突然、'フー、フー!'と大きな声を挙げたのです。地震が怖かったので、自分を励ますために出てきた言葉のようです。今後も活動を続けながら、子どもたちが経験した3・11の記憶を理解し、支援に活かしていきたいと思います』

（臨床心理士佐藤綾子の声）

川内村こころのケアプロジェクト

福島県川内村は2012年4月の警戒区域解除に伴い、住民の帰還が始まりました。行政機能は戻ったものの、村に戻った住民は震災前の4割程度にとどまっています。家族のうち高齢者だけが帰村することが多く、孤独な状況におかれた結果、認知症を発症するケースが目立っています。世界の医療団は精神科医と精神保健福祉士を村へ派遣し、認知症予防や認知症患者を抱える家族をサポートしています。また、村への助言活動を行い、村民の帰還を促すような魅力ある村づくりのコンセプト作りを支援しています。

ニココロ PROJECT（岩手県大槌町「こころのケア」活動）

世界の医療団は、東日本大震災発生直後に岩手県の要請で全国から派遣された支援チームの一つとして、大槌町や釜石市の活動に参加しました。現地パートナーとの連携の下、時間の経過に伴って変化するニーズに合わせて活動を続けてきました。2013年は大槌町社会福祉協議会と協働で「健康のツボ講座」を計29回実施しました。先が見えない不安を抱えたままの方も依然として多いことから、不安と向き合う気持ちを支えることを主眼に置き、からだを動かしてこころに働きかける講座内容にしました。また、地域の心療内科医師にボランティアとして活動に加わっていただき、こころのケアにアクセスしやすい環境づくりを目指しています。

東京プロジェクト（ホームレス状態の人々の精神と生活向上プロジェクト）

精神障害などを抱えてホームレス状態にあり、行政など支援の網から漏れてしまう人々。世界の医療団は2010年にプロジェクトを開始し、支援を行ってきました。2013年に開設された訪問看護ステーション「KAZOC（かぞく）」を新たなパートナーに、居宅生活を始めた元ホームレスの人たちを継続してサポートしています。プロジェクトの活動開始から3年が経ち、支援対象だった人が障害者雇用枠で就職するなど安定した生活を取り戻すケースも出てきています。プロジェクトの性質上、他では支援が難しいと判断された人たちが紹介されてくることも増えてきましたが、一方で、ホームレス状態にある人たちの生活環境は一層厳しくなっており、提言活動も行いました。これらの活動が認められ、第9回精神障害者自立支援活動賞（リリー賞）を受賞しました。

人間開発指数	(186か国中) 10位
5歳未満の乳幼児死亡率	(出生1,000人中) 3人
平均寿命	83.6歳
医師の数	(国民1万人あたり) 21.4人



福島そうそうプロジェクト



川内村こころのケアプロジェクト



ニココロ PROJECT

東京プロジェクト

証言活動

イベント(抜粋)

■ブース出展

アースガーデン灯・夏・秋、アースデイ東京／名古屋、エコライフフェア、グローバルフェスタ、MDGsフェスタ、フレンチブルーミーティング、Jane Birkin sings Serge Gainsbourg "VIA JAPAN" 他

■講演・シンポジウム・セミナー

日本社会事業大学、杏林大学、青山学院大学、愛知教育大学附属岡崎中学校、ウェスレーン・ファンデーション 他

■チャリティイベント

支援者の集い、ルイス・ヴァルチュエナ国際人道写真展シリア・チャリティイベント、クリスマスのタペ in シャンネル・ネクサス・ホール シリア難民のためのチャリティコンサート

■活動報告会



メディア(抜粋)

親善大使 滝川クリステルさん

親善大使就任3年目を迎えました。昨年はAC支援キャンペーン「対話」にて、現地で活動されている医師の方と対談を通して広報活動にご協力させて頂きました。他にもテレビや新聞、電車の中吊り広告等の様々なメディアで広報活動をご覧になった方も沢山いらっしゃるかと思います。今年は、さらに多くの方々にお伝えするのはもちろんですが、お一人お一人に「世界の医療団」の活動に関心を持って頂けるような年にするために頑張ります。



<テレビ>

■NHK 【2013/1/18「東京プロジェクト」】

■NHKエデュケーショナル 【2013/12/10「東京プロジェクト」】

<ラジオ>

■NHKラジオ 【2013/9/26「シリアでの緊急医療支援活動」】

■J-WAVE 【2013/9/27「シリアでの緊急医療支援活動」】

<新聞>

■東京新聞 【2013/2/26「東京プロジェクト」(森川すいめい医師)】

■富山新聞 【2013/3/9「福島そうらプロジェクト」(神山友里看護師)】

■THE JAPAN TIMES 【2013/5/14「世界の医療団親善大使・滝川クリステル」】

<web>

■MTPPro 【2013/4/25「東京プロジェクト」(森川すいめい医師)】

■Yahoo!News 【2013/7/8「感情の架け橋を渡るとき」(柳澤寿男/ハトリック・ダヴィッド)】

<雑誌>

■国際人権ひろば 【2013/3/22「ラオス小児医療プロジェクト」(鈴木彩乃看護師)】

■精神臨床科サービス 【2013/4/1「東京プロジェクト」(中村あずさ)】

キャンペーン

■1000人のスマイル作戦 & ラオス小児医療プロジェクト応援キャンペーン

「ラオス小児医療プロジェクト」と「スマイル作戦」を受ける子どもたちとその家族に、元気を贈り、応援するキャンペーンを開催しました。2013年度は各地施設・イベントにおいて延べ49回開催しました。多くの方にご参加頂き、インスタントカメラやクレヨンを使った、楽しくて温かいメッセージを日本から現地に届けることができました。2014年も引き続き実施します。



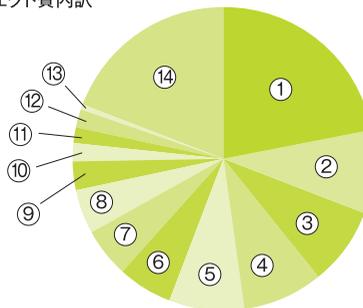
©Maho Harada

2013年度決算

世界の医療団は、1名の監事による会計及び業務の内部監査と、外部の独立した公認会計士による会計監査を毎年度受けています。

収入(単位:日本円)	174,910,189	支出(単位:日本円)	197,572,990
寄付	100,625,901	プロジェクト(医療支援+証言活動)	138,322,583
民間助成金	70,101,832	募金費	48,933,115
収益事業	1,873,157	管理費	10,317,292
謝礼(ほか)	2,139,299		
会費	170,000		

◎プロジェクト費内訳



①ラオスプロジェクト	22.0%
②東京プロジェクト	9.0%
③東日本大震災被災地支援プロジェクト	8.4%
④スマイル作戦	8.4%
⑤サヘル/母子保健、プライマリヘルスケア支援プロジェクト	8.1%
⑥コンゴ/ストリートチルドレン支援プロジェクト	6.0%
⑦シリア/緊急支援プロジェクト	5.2%
⑧フィリピン/緊急支援プロジェクト	4.6%
⑨マリ/緊急支援プロジェクト	3.2%
⑩アフリカ/緊急支援プロジェクト	1.9%
⑪ニジェール/母子保健プロジェクト	1.8%
⑫コートジボワール	1.8%
⑬ネパール/母子保健支援プロジェクト	0.7%
⑭証言活動*	18.9%

*ニュースレター発行、MDMの活動紹介イベント・写真展など開催、NGOイベントへの参加等

世界の医療団は「認定NPO法人」として国税庁より認定されています。世界の医療団へのご寄付は税制上の優遇措置を受けることができます。

政策提言(アドボカシー)

- 北社協 地域福祉活動計画作業部会に委員として推薦され出席。東京都北区における地域福祉活動計画に、東京プロジェクトの視点から計画策定に参加した。
- 厚生労働省において、国への年末年始の生活困窮者施策の整備を求める要望書提出し、交渉を行い、記者会見を開催した。